

とっりの医療  
【クリニコス】  
夏号

2010 summer

# KLI MI KOS

トップインタビュー

鳥取市立病院院長

田中 紀章 氏

この人に注目

鳥取大学大学院医学系研究科教授／  
鳥取大学染色体工学研究センター  
センター長

押村 光雄 氏

鳥取で活躍する女性医師

智頭町国民健康保険  
智頭病院内科

渡邊 ありさ 氏

来たれ研修医！

山陰労災病院

病院探訪

岩美町国民健康保険  
岩美病院

クローズアップ

鳥取の研修医たちの声



# KLINIKOS

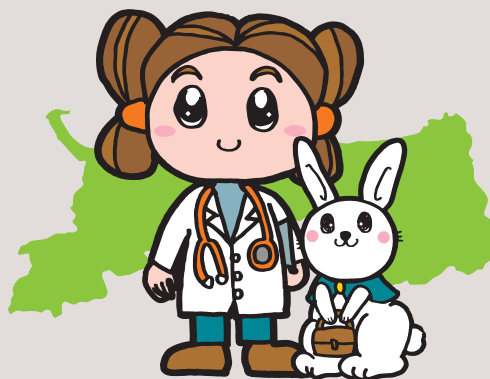
## KLINIKOS (クリニコス) ととりの医療

『KLINIKOS(クリニコス)ーととりの医療』は、鳥取県で展開されている医療の魅力を、現役医師の皆さんの生の声で伝える広報誌です。県内の医療機関ではどのような医師が活躍されているのか、どのような研修、チャレンジができるのか、すばらしい先生方の取り組みや思いを特に若い医師や医学生に発信したいと考えて制作しました。

ギリシャ語の「klinikos」は英語／clinicの語源ともなった言葉で、患者に対する医療行為を意味し、米語辞書の代名詞的存在であるウェブスター辞典では、「臨床講義」や「臨床講義室」を指す言葉として紹介されています。

この冊子に紹介されている先生方や医療機関の取り組みに興味を持たれた方は、ぜひ現場を見学してみてください。願わくば、この冊子が鳥取県で研修、勤務いただくきっかけになれば幸いです。

鳥取県福祉保健部医療政策課



医療の神様  
「**大**国主命」と、  
神話の地**鳥取県**

小さな「ありがとう」のために、大きな夢をのせて…。

鳥取県が舞台と言われている神話「因幡の白兔」で、傷ついた兔を救った大国主命は、医療の神様とされています。

## CONTENTS

### トップインタビュー

4

鳥取市立病院院長

### 田中 紀章 氏

鳥取県で起こる医療体制のダイナミックな変化の目撃者、実行者になってほしい。

### この人に注目

8

鳥取大学大学院医学系研究科教授／  
 鳥取大学染色体工学研究センターセンター長

### 押村 光雄 氏

ヘテロは、重要な要素。社会集団の発展は基盤に「ヘテロな集団」が、あるかないかが鍵になる。

### 鳥取で活躍する女性医師

11

智頭町国民健康保険智頭病院内科

### 渡邊 ありさ 氏

環境とまわりの理解は重要。しかし、それに甘えすぎず医師としての成長の努力も怠らない。

### 来たれ研修医!

14

### 山陰労災病院

副院長(耳鼻咽喉科)／杉原 三郎 氏

厳しい職場ですが、学びたいと考える人には必ず何かを持って帰ってもらえる自信があります。

### 病院探訪

16

### 岩美町国民健康保険岩美病院

院長／渡邊賢司 氏

どんな医師になるのか決断したら、あとは、ひたすら目標に向かい進むべき。

### クローズアップ

18

鳥取の研修医たちの声

### 取材先病院MAP



- ① 鳥取市立病院 <http://hospital.tottori.tottori.jp/>
- ② 鳥取大学医学部附属病院 <http://www2.hosp.med.tottori-u.ac.jp/>
- ③ 智頭町国民健康保険智頭病院 <http://www2.town.chizu.tottori.jp/index.htm>
- ④ 山陰労災病院 <http://www.saninh.rofuku.go.jp/>
- ⑤ 岩美町国民健康保険岩美病院 <http://www.hal.ne.jp/iwamihp/>

## 市立病院を崩壊の淵から なんとか救いたいとの 強い思いを胸に赴任

鳥取市立病院の院長職にとの要請を  
いただき、ふたつ返事でお引き受けし  
て、当院長に就任したのは2009  
年4月のことでした。2008年10月  
の小児科休止に象徴されるとおり、市  
立病院が医師不足にあえぎ、崩壊の淵  
にあると知っていたからです。

県庁所在地にある市立病院が存亡の  
危機にある。もし破綻すれば、多くの  
市民、患者さんたちに多大なる医療上  
の不利益が降りかかるでしょう。県民  
に与える心理的不安も甚大です。その  
ような事態にしては絶対にならないと  
の強い思いを胸に長らくお世話になっ  
た岡山大学からこの地に赴きました。

地域医療の崩壊が叫ばれる中、医療  
問題が山積しているのは、鳥取県に限  
ったことではありません。ですから、  
私の抱いていた憂いも、鳥取市立病院  
赴任が決まる、はるか以前からありま  
した。

憂いてばかりでは問題の解決にはつ  
ながらない。そこで私は、岡山大学時  
代に、外科医の職業教育支援を行う新  
しい医局とも言えるNPO法人「ザ・  
ファースト」を岡山大学医学部第一外  
科の医師と地域病院医師の連帯によっ  
てつくり上げました。主な活動は、大  
動物を用いた外科技能訓練に始まり、  
基幹病院での専門教育、さらに医療管  
理、病院管理にかかわる生涯教育など  
を経て、地域医療に貢献する人材を恒  
常的に養成すること。中国、四国、兵  
庫の病院に養成した医師の派遣なども

行っています。

医師不足、地域医療の崩壊の元凶を  
卒業臨床研修必修化にあるとする大学  
関係者がいらっしやるようですが、そ  
れは問題の矮小化にほかならないでし  
ょう。少なくとも私は、新医師臨床研  
修制度を廃止せよとの意見には賛同し  
ません。実際、地方にあっても、プロ  
グラムに魅力があり、すぐれた指導医  
のいる研修病院には、研修医が集まっ  
ています。

地域医療の崩壊に、臨床研修の必修  
化で拍車がかかったのは確かですが、  
制度をなくせば解決するような簡単な  
問題でないのは明らか。私は、真に地  
域医療の立て直しをするならば、広い  
視野のもと、もっと前向きに、斬新で  
建設的な取り組みをすべきだと思っ  
ています。

# 鳥取県で起こる医療体制の ダイナミックな変化の 目撃者、実行者になってほしい。

トップインタビュー

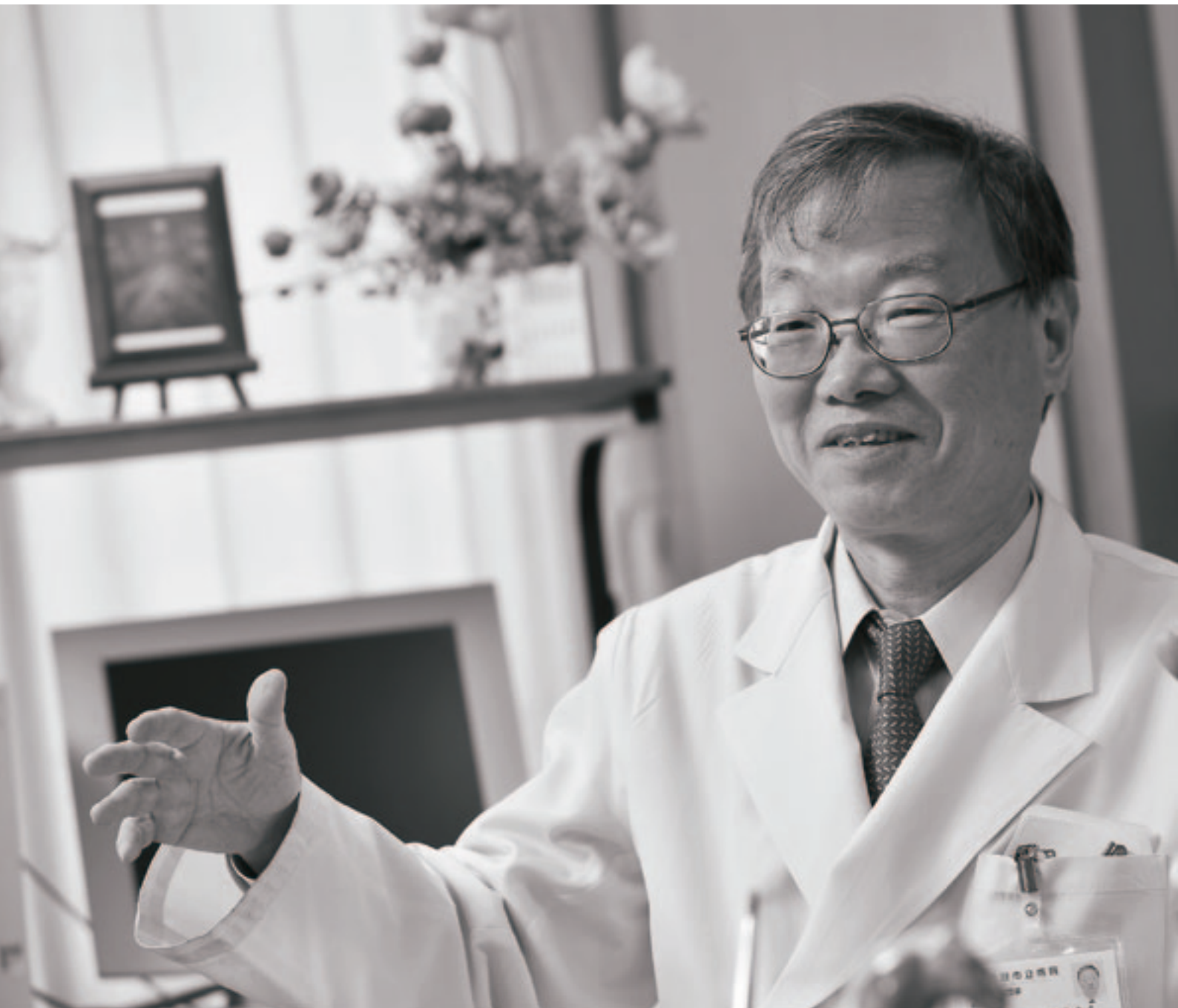
Top Interview

Noriaki Tanaka

鳥取市立病院院長

田中 紀章 氏





### Profile

たなか・のりあき

- 1968年 岡山大学医学部卒業  
岡山大学医学部附属病院第一外科学教室入局
- 1969年 倉敷中央病院外科医員
- 1975年 日本鋼管福山病院外科医長
- 1985年 岡山大学医学部附属病院講師(第一外科)
- 1987年 国立岩国病院外科医長(気管・食道科医長併任)
- 1996年 岡山大学医学部教授(外科学第一講座)
- 2001年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科消化器・腫瘍外科学教授
- 2007年 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科科長
- 2008年 岡山大学医療教育統合開発センターセンター長(兼務)
- 2009年 鳥取市病院事業管理者兼鳥取市立病院院長

### 地域医療に興味を持つ 医学生の学びの場を 3病院が連携して創出

院長に就任し1年、当院及び鳥取県の病院の経営状況、臨床現場の厳しさは想像以上でした。やはり、医師不足は深刻です。統計上では、鳥取県東部

地区には全国平均レベルの数の医師がいることになってきているのに、なぜなのか。その疑問には、早々に回答を得られました。要は、勤務医が、どんどん開業するなど世代交代が進む中、大学の医師派遣機能が低下し、地方勤務を希望する若い医師が減少しているのです。その背景には、このたびの卒後臨

床研修必修化に加え、細分化された専門医の増加の影響が大きくあると考えています。

私の院長就任直前からスタートした医学部学生を対象にすえた市の奨学金制度は、卒業後に当院で研修を行うことを条件に支給されるもので、当面的を射た施策だと思いません。

しかし、大学の地域枠も含めて、奨学金や入学条件で卒業後の進路を地域につなぎとめようというのは姑息な手段というか、本末転倒のように感じます。真に地域医療が大切だと思

い、地域医療に将来をかける医師を育てなければなりません。

そこで、私たちは、地域医療教育を充実させる取り組みに着手。鳥取県東部地区の3つの自治体病院——当院、智頭病院（智頭町）、岩美病院（岩美町）が連携し、地域医療への意欲を持つ医師を教育しようとの試みがスタートしました。2010年3月に1回目の地域医療教育研究会を開催し、5月には2回目が予定されています。同研究会を、地域医療を学ぶ研修医の発表の場、さらには地域医療に興味を持つ医学生の学びの場として育てようというものです。

自治体病院が、若い医師に示せる医療の魅力は、地域医療にこそある。3病院の連携は、そのような認識を一旦したところから生まれました。あえて言わせていただくならば、先進医療に興味ある者は大都市の大病院で学べばいい。

都市から離れた地域には、そのような環境がない代わりに、本当に医師を頼りにし、求める住民や患者たちがいます。そして、都市の病院では学べない全人医療、また福祉と綿密な連携をとりつつ進める医療も学べます。高齢化が進む日本において、最終的にも必要とされる医療を学べると確信を持って言えます。



地域連携を支える「地域医療総合支援センター」の入り口

## 切り分けられていた 医療と福祉をあらためて 一体化させ、必要なかたちに

鳥取県を含めた山陰地方にある自治体病院は、施設がいずれも立派です。

当院も15年前に新築移転し、施設、設備ともに、全国トップレベルの水準にあると自負しています。長らく山陽地方に勤務した私は、山陰を訪れるたびに、そのような感想を持ち、山陰地方の人々の、行政の、医療にかかる願いと情熱の強さを感じていました。

しかし、それはまた、皮肉にも箱物の発想を超えられず、あまねく医師が先進医療、細分化された専門医療を標榜する状況に陥っていることの証左でもありました。大学医学部のカリキュラムの中に地域医療を学べる枠が設けられていない点に不満を持つ学生が多くなる現況を、もつと真摯にとらえるべきだったと思います。

3病院の取り組みは若手医師に向けた熱いメッセージです。しかし私は、それを甘いメッセージにするつもりはありません。私たちの呼びかけに応えて地域医療を学ぼうとするならば、医療が十分でない地域の現実をよく理解したうえで、ある種の覚悟をもって臨んでいただきたい。できあがったものが与えられるとの発想しか持てない方

には、ご遠慮いただきたいとさえ思います。新しい医療を、自分でつくり出す、みんなでつくり上げる、そう考えられる若者の参加を望みます。

私たちが、つくり上げようとしている地域医療は福祉と一体化した医療です。私は、介護保険導入によって切り分けられてしまった医療と福祉をあらためて一体化させ、必要なかたちにする作業は、市町村の自治体病院のみが担える役割だと考えています。市町村においては、医療行政は福祉行政と密接な関係を持ちますし、持たざるをえません。

地域医療の活性化に成功している市町村は、その点の認識が明確で、医療と福祉を総合的に捉えることによって福祉のレベルを徐々に引き上げ、住民の安心につながっています。

私が出院の連携相手として、智頭病院、岩美病院の2つの自治体病院を選んだのは、医療と福祉を一体化した医療を当院で展開しようと思ったため。両院がこれまで成し遂げてきた地域医療は、当院が真摯に学ぶべきことにあふれているからです。

## チーム医療の気風を ステップを踏んで 鳥取県全域に広げる

医療と福祉が一体化した地域医療と

は、つまり、地域レベルのチーム医療です。医療の現場にさまざまな分野の専門家が参加し、ベストな医療を提供するには、専門家同士のリスクと協力が必須。けれども、これまで日本の医学教育、医師教育では「医療は私もののだ」との、医師の独善が許されるかのような価値観が教えられてきました。

地域医療の現場においては、医師がそのような考えを持っていては、医療は一步も前に進みません。かなり厄介ですが、医師の意識改革は避けては通れないでしょう。

幸いにして当院には、急性期病院として、また、がん診療拠点病院として優秀な医師がそろっています。当面は彼らと看護師、コ・メディカルを交えたチーム医療を根づかせる取り組みに注力する考えです。

院内に根づき、確立されたチーム医療の方法論と気風を、次には周辺地域に広げていく。ステップを踏んで、鳥取県東部地区に、そして最後には鳥取県全域に広げ、チーム医療を支えられた、医療と福祉が一体化した地域医療を鳥取県に確立していきます。

皆さんには、ぜひ鳥取県で起こる医療体制のダイナミックな変化の目撃者、実行者になっていただきたいと思っています。



「月明かりの砂漠を行く隊商」(平山郁夫画伯)が病院玄関を飾る



## この人に 注目



ヘテロは、重要な要素。  
社会集団の発展は  
基盤に「ヘテロな集団」が、  
あるかないかが鍵になる。

鳥取大学大学院医学系研究科教授  
鳥取大学染色体工学研究センターセンター長

# 押村 光雄氏

現在、鳥取県はもとより全国レベルでも、  
かなり大きな注目を浴びている人物と言っていだろうか。

押村光雄氏は、HAC（ヒト人工染色体）技術を用いた諸研究の成果を発表し、  
遺伝子治療や抗体医薬の興隆に大きく寄与している。

実のところ彼は医学部出身者ではない。

しかし鳥取大学は押村氏を大学院医学系研究科教授の職に就けている。  
押村氏は、いわば同大医学部の先進性の象徴だ。

押村氏の開発したHACは、筋ジス

トロフィー原因遺伝子の完全修復に成  
功し、2009年12月には世界に向け  
て成果発表が行われた。また、HAC  
で開発した人と同様の薬物代謝活性を  
持ったマウス（ヒト化マウス）は、新  
薬開発のボトルネックとされる新薬候

補化合物の毒性や体内での代謝を人

の臨床試験の前に、より詳細に推定す  
ることを可能にした。

iPS細胞樹立にも活用できる可能  
性が大きいとされるHAC技術のアド

バンテージを示した押村氏と鳥取県の  
バイオ技術は、以降、一躍全国的な耳

目を集めるようになったのである。

これらの成果は、さかのぼること約  
20年、1990年初頭にして医学部に  
生命科学科を新設した、鳥取大学の先  
進性が獲得した実りと言っていいでし  
よう。

私は鳥根大学文理学部理学科を卒業



し、その後、北海道大学で染色体の工学研究を始めました。卒業後は長く海外や関東地方で研究生生活を送っていました。生命科学科開設を控えて医学部の教授にとお声をかけていただいた折は自然環境に恵まれた地で、白紙に絵を描く思いで鳥取大学からの招聘を受け止めたものです。

1990年に生命科学科教授となった押村氏は、がんの基礎研究分野ですぐに成果をあげ、同時期にHAC開発のめども立てた。2004年には「染色体工学技術開発拠点形成プロジェクト」が、文科省21世紀COEプログラムに、2009年には染色体工学研究を用いたiPS細胞による再生医療のための基盤研究が、科学技術振興機構(JST)の戦略的創造研究推進事業(CREST)に採択された。

それらの目覚ましい成果は県行政をも動かし、バイオ産業の一大集積地を鳥

取大学米子キャンパス内につくる「とっとりバイオフロンティア」計画が策定されるにいたった。

地域活性化の取り組みの一助となることは、大学人として誇らしい一言に尽きます。これらの成果、動きもまた、鳥取大学が先進的取り組みに躊躇しない姿勢を持っていたからこそ実現したのだと感じます。

2003年には大学院に医学系研究科機能再生医学と称する、全国にも例を見ない専攻を開設。2010年4月には染色体工学研究センターを設立し、私の研究活動を全面的にバックアップしてくれています。

鳥取大学医学部は、臨床と研究の双方にバランス良く力を注いでいる点がすばらしいと思います。さらには、すぐれた指導者を集め、看護師、検査技師を育てる保健学科も開設し、臨床、基礎研究、保健と3つの柱で医学と医療に貢献する全容は、全国的にも稀な存在感を示しているでしょう。

戦略的創造研究推進事業(CREST)に採択されたiPS細胞による再生医療の研究に関しては、「人工多能性幹細胞(iPS細胞)作製・制御等の医療基盤技術」として2008年に国内特許を出願している。

この成果は、iPS細胞の生みの親

として名高い京都大学の山中伸弥教授の研究グループとの共同研究によって得られたものだ。

山中先生は、彼が奈良先端科学技術大学院大学に在籍されているころから存じ上げていました。

彼がiPS細胞の確立を発表したシンポジウムに私も出席しており、その場で、我々の人工染色体とiPS細胞をドッキングさせて得られるメリットの可能性を感じた。長く人工染色体の医療や医薬品への応用の道を探っていた私にとって、文字どおり光明を見る思いでした。

山中先生にすぐにお声をかけ、米子に足を運んでいただき、共同研究の構想をお話ししました。ほどなくこちらのスタッフの京都大学への派遣が決まり、数ヵ月後には、山中先生の技術を鳥取大学に持ち帰ってきました。

この研究成果の意味は、とてつもなく大きいと感じています。基礎研究と臨床研究が融合し、新しい切り口から医療の進歩をめざす試金石になるはず

です。  
押村氏は「自分が臨床医となるイメージが持てなかった」を理由に医学部ではなく文理学部理学科に進んだ。しかし生来の医学への興味もあってか、一貫して医学の基礎研究分野を歩む。



鳥取大学染色体工学研究センターでの実験の様子

この人に  
注目

そのような自身の足跡と押村氏を受け入れた鳥取大学の存在が、医学分野においてどのような意味を持つかについて、押村氏はギリシャ語の「異なる」を語源とした「ヘテロ (hetero)」なる接頭辞を用いて説いてくれた。

生物の進化において、ヘテロはきわめて重要な要素です。社会集団の発展も同様で、基盤にいかにも「ヘテロな集団」があるかが鍵になります。純粹すぎるものは、いつか減じるしかない。生物進化の歴史と社会科学の歴史のどちらもが、それを如実に証明して見せてくれています。

そのような意味で、理学系の私が医学系の研究分野に貢献できている事実は、日本において、医学がまだまだ健全に発展していることの証左と感じています。さらに言えば、実際にミクスチャーを意図して起こそうとしている鳥取大学医学部の見識をたいへん誇らしく思います。

私は今、大学院医学系研究科の教壇で、医学部の学部学生にも講義をしています。そうした「ヘテロ」な環境を与えてくれる大学に心から感謝するばかりです。

押村氏は、「常に今いる場所を終の棲家と考え自分らしく研究に没頭する」をポリシーとしているそうだ。境港市

に生まれ鳥根大学と北海道大学で学んだ身ではあるが、生まれ故郷で暮らすことに特別なこだわりは持っていないなかつた。

しかし今、いくつもの偶然の末にたどり着いた「鳥取での研究生活」は、想像を超えて豊かで、充実していると語る。

まず言えるのは、現代の交通事情のもとでは、少なくとも私の研究生活で頻度の高い「東京へのアクセス」において、鳥取県にはなんのデメリットもないということです。

東京で出会う大阪や京都の研究者は、新幹線で3時間ほどをかけて東京まで来ていますが、私は米子空港から1時間半で到着できます(笑)。同様に現代の通信環境は、情報環境における地方在住者がゆえのデメリットもなくしてくれる。

さらに、研究者にとっての生活環境という側面から考えてみても、自然に囲まれ静寂を謳歌できる地方生活が理想的なのは、古今変わることはありません。

ちなみに私は、歌曲、社交ダンス、ピアノと、通勤時間がかからない分の趣味も謳歌しています(笑)。ここが生まれ故郷である点を差し引いても、長い研究生活の中で、今がもつとも幸福であると断言できます。

押村氏から現代の若者たちへのアドバイスは、しごく簡潔で、かつ、印象的なものであった。

彼らは研究に取り組み際に、無意識に「万能な研究」を標榜してしまう傾向にある。そして、同じ根から「恵まれた自然」の中に暮らす幸福な生活に気づかないのだと思う。

ヘテロな取り組みを推奨し、生まれた成果を躊躇なく産学連携に発展させる鳥取大学の姿勢は、「研究は常に万能である必要はなく、特長を伸ばす選択肢もある」との真理を示しています。私でさえ、それをこの地で学んだ気がする。

もし研究生活に迷いを感じた人がいるなら、鳥取県での研究生活を体験することをおすすめします。自然の中で暮らすすばらしさを実感できるようになるころには、特長ある研究の楽しさにも気づいているかもしれませんよ。



## Profile

おしむら・みつお

- 1974年 ニューヨーク州立ロスウェルパークがん研究所研究員
- 1977年 東京医科歯科大学難治疾患研究所助手
- 1982年 アメリカ国立環境保健科学研究所特別研究員
- 1986年 神奈川県立がんセンター臨床研究所主任研究員
- 1990年 鳥取大学医学部医学科教授・生命科学科教授
- 2003年 鳥取大学大学院医学系研究科機能再生医科学専攻教授・専攻長
- 鳥取大学大学院医学系研究科機能再生医科学専攻専攻長
- 2009年 鳥取大学染色体工学研究センターセンター長

鳥取大学染色体工学研究センターの見学などのお問い合わせ先

鳥取大学染色体工学研究センター

〒683-8503

鳥取県米子市西町86

TEL : 0859-38-6216

URL : <http://www.med.tottori-u.ac.jp/p/chromosome/>

# 渡邊 ありさ氏

智頭町国民健康保険智頭病院内科

環境とまわりの理解は重要。  
しかし、それに甘えすぎず  
医師としての成長の努力も怠らない。



## Profile

わたなべ・ありさ

- 2001年 自治医科大学医学部医学科卒業  
自治医科大学附属大宮(現さいたま)医療センター(初期研修)
- 2002年 結婚
- 2003年 国保町立小鹿野中央病院内科(埼玉県)
- 2005年 長女出産  
自治医科大学附属大宮(現さいたま)医療センター(後期研修)
- 2006年 飯能市国民健康保険飯能市立病院内科(埼玉県)
- 2007年 岩美町国民健康保険岩美病院内科(鳥取県)
- 2009年 二女出産  
智頭町国民健康保険智頭病院内科(鳥取県)

## 鳥取で活躍する 女性医師

Arisa Watanabe





## 初期研修と後期研修の 合間でやり繰りし なんとか第二子を出産

自治医科大学(以下、自治医大)——  
地域医療を担う人材の育成を目的とし  
て1972年に全国の都道府県が共同  
して設立した学校法人である。

2001年、地域医療を志して同大  
を卒業した渡邊ありさ氏は、地元埼玉  
県に戻り自治医科大学附属大宮(現さ  
いたま)医療センターにて初期研修を  
始めるが、間もなく結婚し、2003  
年からは国保町立小鹿野中央病院にて  
へき地医療にたずさわり始めた。

「私が地域医療に興味を持ったのは、  
東京で開業医をしている祖父母と同居

していたころ。東京とはいえ『人々の  
生活に密着した医療』のすばらしさを  
身近に感じて、いつしか地域に根ざす  
医師になりたいと願うようになりまし  
た。自治医大を見つけたときには、『こ  
れだ!』と胸が躍ったものです。  
ところが、初期研修修了後3年目、  
実際にへき地の病院に赴任してみると  
仕事は想像以上にたいへんでした。赴  
任先の国保町立小鹿野中央病院がある  
秩父地域の人口は埼玉県人口の70分の  
3程度で、行政の目が行き届かず、医  
療過疎の問題は深刻。とにかく医師が  
少なく体力的にハードでしたし、辛さ  
を共有したり励まし合ったりする仲間  
もほとんどおらず精神的にも厳しかっ  
たですね」

実は、渡邊氏の結婚した相手は鳥取  
県出身で1学年下の自治医大生。つま  
り、夫は鳥取県に戻って渡邊氏同様、  
へき地医療にたずさわらなければなら  
ず、県同士の協議により夫が埼玉県に  
派遣されるまでの1年半の間は遠距離  
結婚をつづけていた。孤独感はいっそ  
う強いものだっただろう。

へき地医療の過酷さを実感する日々  
に、吉報が舞い込む。妊娠したのであ  
る。しかし、渡邊氏は、単純に喜んで  
はいられなかったはず。いったい、ど  
のようにして出産と研修とのやり繰り  
をしたのであろうか。

「ひとつの県において、自治医大の卒  
後10年未満の医師で、へき地に派遣さ  
れるのは、1カ所の病院につき毎年約  
2、3人です。

したがって私が長期にわたって育児  
をとるわけにはいきません。ただ、幸  
運にも出産予定日が年度末だった。そ  
こで、産休と育児をあわせて6カ月間  
だけとり、へき地勤務が一段落すると  
同時に出産、すぐに後期研修に入るス  
ケジュールとし、なんとか切り抜けま  
した(笑)」

## 鳥取県に来て 人や環境に恵まれ 無事、第二子も出産

自治医大を卒業してから、6年後の  
2007年、渡邊氏は鳥取県に居を移  
す。鳥取県の地域医療は、渡邊氏の目  
にはどのように映ったのだろうか。

「行政がへき地で働いている医師たち  
の意見に耳を傾けてくれているという  
印象があります。おそらく県全体に占  
める医療過疎地域の比率が少なくない  
せいもあるのですが、埼玉県にい  
たときと比較すると行政の医療に対す  
る姿勢に大きな違いを感じました。

また、自治医大の先輩の活躍してい  
る姿があちこちで見られ、とても励み  
になりました。

人や環境に恵まれて——鳥取に来て  
初めてへき地医療の面白さを見つけら  
れたように思います」

そして鳥取に移ってからおよそ2年  
後、渡邊氏は2度目の出産を迎えた。  
出産を機に開業医になったり、時間の  
制約が少ない医療機関に移る女性医師  
は多い。ところが渡邊氏は驚くべきこ

## 鳥取で活躍する 女性医師

Arisa Watanabe

とに第二子を出産した後も出産前と変わらない状態で働きつづけている。

「子育ての環境が整っていた点に助けられました。自治医大の場合、卒後9年間は行政が勤務先を決めます。私は産休明けに智頭町国民健康保険智頭病院に赴任したのですが、幸運にも同院では2009年1月から院内保育、病児保育が始まっていたのです。」

実際に今、院内保育を利用していますが、授乳の必要なときには、内線ですぐ呼んでもらえたり、子どもが風邪をひいたときにも病児保育に預けられるので、とても助かっています」

### 医師をつづけるならば 制度やまわりの理解に 甘えすぎてはいけない

女性の社会進出が進んだとは言っても、実際、日本では出産・子育てをしながら働きつづけるための制度も環境もまだ十分ではない。女性が出産・子育てをしながら男性と同等に働くには、多大なる努力が必要だ。

「第一子、第二子出産時の休業期間はそれぞれ6カ月と4カ月です。第二子のときはそれほどなかったのですが、第一子を出産したときは、卒後4年程度で、まだ医師として駆け出しだったせいも、復帰後は半年間の休業期間に手技のレベルがすごく落ちたと感

じました。男性医師がどんどん力をつけていく中での産休——その期間の後れを取り戻すのは、本当にたいへんでした。」

自治医大の義務年限終了後の2010年4月からは、週に一度、鳥取県立中央病院に内視鏡の勉強に行かせてもらっています」

院内保育に預けるとはいえ、小さな子どもと離れて働くのは後ろ髪をひかれる思いだろう。にもかかわらず、渡邊氏は出産後、わずか2カ月で現場復帰し、スキルアップのための鍛錬も怠らない。

彼女が自らに言い聞かせているのは「甘えすぎないこと」だという。

「女性にとつて働きやすい環境が整えられ、出産・子育てに対して、まわりの人たちの理解を得られるのは、幸運ですし、私みたいへんありがたいと思っています。しかし、恵まれた環境に甘えすぎていては、結果的に自分の能力の範囲を狭めてしまうのではないのでしょうか。」

子育てと仕事の両立は、環境や周囲の理解以上に、自分自身のモチベーションがネックになると思うのです。自らの可能性を狭めないためにも、育児も仕事もベストをめざし、自分に厳しく、常に向上心を持ちつづけていきたいですね」



来たれ  
研修医!

# 山陰労災病院

鳥取県米子市皆生新田にある山陰労災病院は1963年に山陰地方の勤労者医療を担う施設として誕生した。卒後臨床研修必修化の年である2004年には、同時に独立行政法人化という一大転機も迎えたが、臨床研修必修化は「手づくり」のプログラムで、独立行政法人化はスタッフが一丸となった医療への取り組みで、それぞれ見事に乗り切り、現在にいたっている。



厳しい職場ですが、  
学びたいと考える人には  
必ず何かを持って帰ってもらえる  
自信があります。

副院長(耳鼻咽喉科)

杉原 三郎氏

2003年より、まったく何もない状態からつくり上げたのが現在の初期研修プログラムなのです。

他院の既存プログラムを移植する方法もあったのですが、当院は、手間を惜しまずオリジナルなものをつくることにこだわりました。

の機運が生まれたのを、今でもよく憶えています。

現在は、各病院それぞれが他院と協力関係を築いており、当院は小児科と婦人科の研修を米子医療センターと博愛病院にお願いしています。また、鳥取大学医学部とは、たすぎがけの研修をする関係にあります。鳥取大学の初期研修医が、希望すれば一定期間の研修を当院で行えるようになっており、今年度は1年次研修医を1年の期間で4人、2年次研修医を3〜9カ月の期間で5人受け入れました。

Q 貴院の卒後研修には、どのような特徴がありますか。

いろいろな捉え方があるでしょうが私としてはまず、ゼロから手づくりした研修プログラムである点を、特徴として挙げたいですね。2004年に臨床研修が必修化されるまで、当院には研修プログラムなど、いっさいありませんでした(笑)。制度導入が迫った

Q ご苦労も多かったでしょう。

たとえば、スーパーローテーションと言われても、当院には産婦人科や小児科がありません。ただ、そこで他院に協力を仰ぐと周囲を見渡してみると、米子医療圏内の他院も同様の課題を抱えている事実がわかりました。臨床研修必修化を機に、それまでライバルでしかなかった病院間に一気に協力的

Q ほかにも研修に関して特徴があれば教えてください。

なんとと言っても、2年間、初期研修医に宿直をさせない点でしょう。全国的にも、きわめて特徴的な方針だと思います。



います。新人医師にとって宿直は恐怖そのもの。私にも経験がありますが、いかに上級医がいようと、恐怖に近い不安はぬぐえません。それが原因で健康を損なう者も明らかにいます。初期研修医の宿直は、確かに病院の人手不足対策には寄与しますが、医師養成にも、患者にとってもプラスとは言えないのではないのでしょうか。当院では、救急患者の対応は、日中の当直勤務で十分に学べると判断しました。

**Q** プログラム上で何か工夫されている点がありますか？

初期研修では2年目の最後の1ヵ月を「まとめの月」として空けておき、研修内容を振り返って、経験しなければならなかった点が見つかれば、補う

ために使うようにしています。また、2年目は1年目よりフリーに、つまり、より希望する科を多くまわれるようにとの配慮から、厚生労働省のモデルプログラムでは2年目に入っている地域医療を1年目の最終月にまわし、2年目のスケジュールに余裕を持たせています。

**Q** 鳥取大学医学部から、初期研修医4人を受け入れていると聞きました。貴院の研修に魅力がなければ、4人もの研修医が選択はしないと思います。

どうやら、コモンディージーズな症例を多数経験できる点を魅力と感じられているようです。昨年度は、予想以上の人数の医師が当院での研修を選択してくれ、デスクが足りなくなったほどです(笑)。当院では研修終了時にアンケートをとっているのですが、毎年、「屋根瓦ではなく、現在最高レベルの医師から、直接学べたところが有意義であった」との感想が多く返ってきます。当院では、大学であれば教授クラスの実力者が臨床の現場でばりばり働いていますし、各科の指導医も兼ねています。自慢ではありませんが、各科で屋根瓦をつくるほどスタッフ数がいま

から(笑)、ローテートでまわる研修医は、行った先の科で教授クラスの医師に直接、1対1、場合によっては1対2で——2が指導医ですよ(笑)、みっちり教えてもらえます。そのうえ、繰り返しになりますが、大病院に比べて症例数は圧倒的ですから、心から学びたいと考えている研修医には魅力的でしょう。

**Q** 研修医の処遇、待遇については。 当院は半分公立とも言える経営体制のため、なかなか研修医の給与アップについては市中病院のように迅速には手続が進みませんでした。しかし、ようやく今年度、研修医に対する給与アップの申請が通りました。結果、鳥取県内では、初期研修医は市中病院並みになり、後期研修医の給与はトップになりました。

**Q** 先生の「手づくり」は、これからもつづくのでしょうか。

研修責任者の役目を解かれるまではつづくでしょうし、つづけたいと思っています。 現在も多くの研修病院が持っている各科の基礎の基礎をまとめた研修手帳の作成を構想しているところ。知人を

通じていくつか他院のものを入手し、当院の手帳はどんなものであるべきかを思案しています。2年後には、完成させる計画です。

**Q** 「手づくり」は苦勞の連続だと思えます。勞を惜しまず継続できている要因は？

教える側、教わる側、双方から喜ぶ顔や声が伝わってくるからでしょう。 思えば、辛いことがあっても「ありがとう」の一言で救われるのは、医師の仕事に通じていますね。

**Q** どんな研修医にきてほしいとお考えですか？

研修期間の過ごし方は、それぞれの人生設計に沿ってさまざまあると思います。薬をして研修期間を終えたいと思う方には、それなりに薬ができる研修場所もあるでしょう。ですが、当院での研修を選ばずなら、決して薬などできないと覚悟してきてください。 厳しい職場です。しかし、真に学びたい人には、必ず何かを持って帰ってもらえる自信があります。やる気さえあれば、必ず力をつけられますし、やる気のない人には決して務まらない病院だと申し上げておきたいです。



杉原氏の部屋のドアには「研修医、指導医のためのかけ込み寺」の文字が

# 岩美町国民健康保険 岩美病院

鳥取県東端の町・岩美町。風光明媚な自然には恵まれても、医療には恵まれず、かつては、いわゆる医療過疎地域だった。細々と存続していた岩美町国民健康保険岩美病院（以下、岩美病院）の再生を図り、見事に軌道に乗せたのは、1987年に同院に着任し、現在、院長を務める渡邊賢司氏。彼の尽力によって建て替えられた新病院は、都心にあってもおかしくないような近代的で、充実した機器を備えたものであった。



私は岩美町生まれ。なんとか自分の手で病院を立て直し、地域に貢献したいと思った。

■今や地域住民にはなくてはならない存在となっている岩美病院。しかし、渡邊賢司氏が着任した当初は、設備もスタッフも不十分な「中国四国地方でも有名な赤字病院」だったそうだ。

「当院は、鳥取大学の関連病院で、同大から派遣された医師が大半でしたが、規模が小さかったせいでしよう、医師が大学の都合で引き揚げられたり、再び派遣されたり——そんなことが昔から何度も繰り返されていました。したがって、医師不足は常に深刻な問題でした。」

加えて、町立病院であるため、町に政争が起きると必ず巻き込まれ、町長が変わるたびに当院の院長も変わってしまう。病院の建物も古く、お世辞にも清潔とは言いがたかった。とても質の良い医療を提供できるような状況ではありませんでした」

渡邊氏は自治医科大学（以下、自治医大）の卒業生。同院に着任して2年後に9年の義務年限を終えたのだが、その折、母校の附属病院で働かないかと声がかかる。へき地医療に身を捧げるつもりで自治医大に進んだが、このときばかりは、さすがに同院にいつづけるべきか、少し大きな病院で修練を積もうか悩んだそうだ。そして、逡巡の挙句に選んだのは岩美病院だった。

「へき地医療から離れていいのかといった葛藤と郷土愛とも言える気持ちから出した結論です。実は、私は岩美町で生まれ育ち、子どものころから当院を近くでずっと見ていました。子どもの目から見ても、いつ潰れるかわからないような病院だった（笑）。なんとか自分の手で立て直し、地域に貢献したいと思いました」

■1997年、渡邊氏は病院長に就任。すでに彼は、病院を変えるいろいろな構想を持っていた。玄関を自動ドアにすること、掃除を外注に出して清潔感を保つこと、病院の外壁を塗り直し明るい印象にすること——。しかし何をすることも先立つものがなければ話にならない。なんとか病院の収入を増やす良策はないものかと思案していた渡邊氏に絶好の話が持ち込まれる。

「鳥取県立中央病院には透析を必要とする患者さんが遠方からたくさん訪れており、当院がサテライト病院の位置づけで透析を始めると助かるといった話を持ちかけられたのです。早速、かつて産婦人科があった時代に分娩室として使用していた部屋を改装して透析を始めました。またたく間に多くの透析患者さんが来院し始め徐々に病院経営は好転、病院の改装や設備の充実などにも手がまわるようになりま



した。

どんなに病院を良くしようとの意欲があっても、資金がなければどうにもなりません。だからこそ、経営に対しても医師は敏感でなければならぬ。規模が小さいへき地の病院では、特にそうなのだと思います」

■2004年5月。同院は新築移転し、新しい一歩を踏み出した。少子高齢化を迎えるにあたって、「すこやかセンター」という保健、医療、福祉を総合的に担う施設が行政によってつくれ、同院はその中心施設として再スタートしたのだ。

設備としては、一般病床60床、療養病床50床、認知症病床50床の合計16

0床とし、外来部門では、訪問診療に加え、新たに通所リハビリ、訪問リハビリも開始。在宅医療を積極的に推進し、循環型の地域包括医療を展開する方針を定めた。

病院の規模を大きくするにあたり、渡邊氏は医療圏の拡大も視野に入っていた。

「今後は、岩美町の住民だけでなく、隣接している兵庫県北部地域も含めた広いエリアでの医療展開を検討しています。」

当院は岩美町立ではありませんが、周辺には医療過疎地がいくつもあります。自分の町だけでなく、医療が充足していない地域を少しでもカバーしていく発想も大切でしょう」

■なかなか解消されないへき地での医師不足の問題。解決しないどころか、状況はますます深刻さを増している。最後に長年にわたり、へき地医療にたずさわってきた渡邊氏に若い医師たちに向けてエールの言葉をお願いした。

「若いころ、特に大学に入学したてのころは、自分なりの理想の医師像を本気で思い描いていたのではないでしょうか。その気持ちをぜひ大事にしてほしいですね。」

分に責任を持ち、目標に向かってがむしやりに努力してほしい。

私がへき地医療に取り組もうと決断したのは、自治医大に入学した時点です。私は自治医大に入りたいと望み、大学側からも選んでもらえた。へき地医療に出会ったのは、ひとつの縁でした。途中で迷いが生じた時期もありましたが、結局は初志貫徹して、へき地医療にまい進してきたからこそ、今があるのだと思います」

さらに渡邊氏は、へき地医療についてこう言及する。

どんな医師になるのか決断したら、あとは、ひたすら目標に向かい、がむしやりに進むべき。

「私は30年以上もへき地医療に取り組んできましたが、へき地医療がほかの専門医療と違って面白いからつづいたわけではありません(笑)。要は、どれを選んでも同じなのです。」

長い間、同じことばかりを繰り返していたら当然、飽きてきます。大切なのは、自分が面白いと思える何かを見つけてること。常に『面白い』と思えるものを自分の中に持つておくのです。悪い意味で慣れないように。そうすれ

ば、どんな医療も楽しくつづけられるでしょう。

だから私は、若い医師が当院に研修や見学に来てくれるのが楽しみでなりません。新しい風を吹き込んで、刺激を与えてくれますから」

「へき地医療は特に面白いわけではない」と話す渡邊氏だが、30年以上もたずさわりの、今なお積極的に取り組んでいる彼自身の姿が、へき地医療の中に尽きない面白さがある事実を証明していると言えよう。

岩美町国民健康保険岩美病院の見学などのお問い合わせ先

岩美町国民健康保険岩美病院

〒681-0003

鳥取県岩美郡岩美町浦富1029番地2

TEL : 0857-73-1421 / FAX : 0857-73-0028

URL : <http://www.hal.ne.jp/iwamihp/>





# 鳥取の 研修医たちの声

男女ともに働きやすい職場環境づくりに熱心で、  
さまざまな取り組みを開始。

鳥取大学病院研修医2年目

## 阪本 綾子氏

「ふるさは遠きにありて思ふもの」と言うが、自分は生まれてから今まで一度も山陰地方から出たことがない。ただ、私のふるさは鳥取県であり、私の母校は鳥取大学であるということに感謝しつつ、研修生活を送っている。

研修先を決めるとき、将来、「鳥取県で子育てをしたい」と思って決めた。鳥取大学は、男女ともに働きやすい職場環境をつくることに熱心で、ワークライフバランスサポートとして、さまざまな取り組みを開始している。現在、さらに充実し、実際に子どもが産まれた今、たいへんお世話になっている。



米国指導医による回診



シミュレーター研修風景

鳥取大学病院で研修して良かったことは、まず患者さんがあたたかいことだ。研修医なんて何もできず、患者さんにとってはいい迷惑なことも多いのに、「がんばってなあ」、「いつもありがとう」なんて言われる

と、本当にモチベーションが上がる。

将来は、私を育ててくれた（今も発育中）患者さんにしっかりと恩返しできるような、いいお医者さんにならんとなあと切実に感じる。

将来、自分の科に入らない研修医に対しても  
医師として必要なことを全力で教えてくれる。

鳥取県立中央病院1年次研修医

## 後藤 寛之氏

当院は鳥取県東部の3次救急を担うため重症例に多く出会う。一方で、市中病院ならではのコモンディジーも豊富だ。したがって研修医は、月4回の救急外來当直を行う中で軽症から重症までバランス良く経験することができる。もちろん戦力としても働くが、診察後は必ず指導医の確認を受けるので安心して研修することが可能だ。救急外來は医師としての診断、対応能力を大きく伸ばしてくれるものと思う。

当院では病院全体で研修医を育てようという姿勢がある。将来自分の科に入らな

い研修医に対しても、医師として必要なことを全力で教えてくれる。研修修了後、大学で勉強したいと考えている私のような研修医も快く受け入れてくれ、感謝の念にたえない。

2年次研修医といっしょに当直すると、実力の違いに圧倒される。私が当院を選んだ理由のひとつである。2年次研修医が1年次を教えるのも当院の特徴なので、しっかりと経験を積んで、来年新たに訪れる研修医に、自分が教えてもらったことをしっかりと伝えていきたいと思う。



CVCのトレーニング風景

## 『KLINIKOS』夏号の 編集を終えて

生涯初の鳥取来訪時、米子から日南へ向かう特急列車の車窓に現れた、雪を戴く大山の美しさに息を飲みました。冬号、春号と取材を重ねる中、インタビューに応じてくださった医師の皆さんが異口同音に鳥取県の四季折々の自然の美しさを口にしました。

4月下旬、夏号の取材で訪れた米子市、鳥取市は、異常気象の影響か、残念ながら桜の見ごろとは言えませんが、鳥取から岩美への移動の車中から見えた浦富海岸は、さすが「山陰の松島」とも呼ばれるだけあって、数多くの奇岩・岩礁が散在しており絶景でした。

東京と鳥取を往復する機中から目にする美しい海と表情豊かな山並み、そして海岸線のコントラストから、この土地の四季がどんなものか、ぼんやりとですがイメージできるようになった気がします。また、やはりほとんどの皆さんが語ってくださった、土地の人々の人情の厚さは、すでにしっかりと実体験できました。流れる時間そのものが優しく、無理をせず、身構えることもなく暮らせる土地だと、頭ではなく五感が身体に訴えてきます。

医師が、長い医師人生の中で、ゆったりとした気持ちで地域医療とじっくり向き合う時期を持つことは決して無駄にはならないだろう。そんな思いをめぐらせながらの3度目の鳥取取材でありました。

制作スタッフ一同

### STAFF

発行	鳥取県福祉保健部医療政策課 ( <a href="http://www.pref.tottori.lg.jp">http://www.pref.tottori.lg.jp</a> )
編集制作	株式会社メディカル・プリンプル社 ( <a href="http://www.medical-principle.co.jp">http://www.medical-principle.co.jp</a> )
編集協力	株式会社カレット ( <a href="http://www.care-t.co.jp">http://www.care-t.co.jp</a> )
編集長	中村敬彦
副編集長	及川佐知枝
制作コーディネーター	杉浦美奈子
ライター	清水洋一
カメラマン	木内博
アートディレクター	鈴木道雄

**KLINIKOS**  
ととりの医療  
夏号  
2010 summer

# 鳥取県の医療を支える医師を支援します。

## 鳥取県医師登録・派遣システム(鳥取県ドクターバンク)

地域医療に携わりながら、医師のキャリア形成を図ります

### 地域医療ローテーションコース

本人の希望等(キャリアビジョン)により、長期の派遣等の計画を策定して自治体立病院等への派遣を行います。

- 派遣等計画には、県立病院、鳥取大学医学部における研修期間を設定することができます。
- 派遣先、派遣計画期間の終期などは相談に応じます。

子育て等で現場を離れた医師の復帰を支援します

### 子育て離職医師等復帰支援コース

子育てなどにより現場を離れた医師を対象に、現場復帰のための研修を県立病院、鳥取大学医学部附属病院などで行います。

- 本人の希望等により勤務時間、勤務日数等を調整します。(この場合は非常勤採用となります)
- 研修期間は最大で1年間です。(相談に応じます)

県内医療機関の求人を紹介します

### 無料職業紹介コース

県庁内に「無料職業紹介所」を設置し、鳥取県内の医療機関からの求人情報の提供及びこれらの医療機関への就業のあっせん、紹介を行います。

- 無料職業紹介の場合は、各医療機関が直接雇用することとなり、県職員の身分は付与されません。
- 採用の可否は求人医療機関が面接等により決定します。また、給与等の勤務条件は各医療機関規定のものとなります。

## 鳥取県専門研修医師支援事業

県外の医療機関で研修を行い、その成果を県内で活かしていただく医師を支援します。

鳥取県ドクターバンクの定員枠を利用し、県職員(知事部局常勤)として採用し、県外病院に対して研修派遣(6か月～2年)を行います。

- 研修後、鳥取県の医療に貢献しようとする医師(医師免許取得後おおむね5～10年目程度)であれば、出身地、出身大学等は問いません。ただし、臨床医に限ります。
- 研修先医療機関は、日本国内に所在するものに限りです。(詳細な研修内容は、選考時にプレゼンテーションしていただきます)
- 研修修了後は、県内医療機関で研修期間の2倍に相当する期間の勤務を求め、習得技術の県内医療への還元、県内の若手医師の指導等に当たっていただくことを求めます。(採用時に県内勤務を定める「誓約書」を提出いただきます)

## 鳥取県医師海外留学資金貸付金

海外の医療機関で研修を行い、その成果を県内で伝達していただく医師を支援します。

海外において国内では修得することが難しい診療に係る知識や技術を修得する研修を受ける者で、留学終了後、知事が指定する県内の病院に勤務し、修得した知識または技術を伝達しようとする者に対し、留学に必要な資金を貸し付けます。

- 借受者の資格/医師免許取得後5～15年目以内の医師で専門医資格を有する者または自治医科大学を卒業した者。
- 貸付金額/留学における研修経費月額30万円及び渡航経費。(帰国に要する経費を含むものとし、100万円を限度とする)
- 貸付期間/留学研修を始める日の属する月から留学研修を終える日の属する月まで。(6月以上、24月以内)
- 貸付利率等/無利子(連帯保証人、保証人が各1名必要)
- 返還免除条件/留学研修を終了した日から3月以内に知事が指定する病院において常勤医師としての勤務を開始し、貸付金の貸与を受けた期間の2倍に相当する期間以上を当該病院において業務に従事し、かつ、勤務開始日から1年以内に留学研修で得た成果を伝達する講習会を県内において開催すること。(全額免除)

詳しい条件等は鳥取県ホームページ (<http://www.pref.tottori.lg.jp/iryouseisaku/>) をご確認ください。



■お問い合わせ先 **鳥取県庁福祉保健部医療政策課医師確保推進室**

〒680-8570 鳥取県鳥取市東町1-220

電話：0857-26-7195 ファクシミリ：0857-21-3048 E-mail：iryouseisaku@pref.tottori.jp